

◆書評◆

デビ・ブラウン著／村山光子・吉野智子訳

『アスピーガールの
心と体を守る性のルール』

(東洋館出版社 2017年 ISBN: 978-4-491-03329-7 1800円+税)



稲田 尚子

(帝京大学 文学部心理学科)

アスピーガールとは、アスペルガー障害あるいはその傾向をもつ女性の愛称である。読者の方々は、アスペルガー障害、アスペルガー症候群などの名称を聞いたことはおありだろうか。アスペルガー障害は、国際的な操作的診断基準の1つであるDSM-IV-TR (APA, 2000)では、広汎性発達障害の下位診断群の1つであったが、2013年に改定されたDSM-5 (APA, 2013)では、ほかの下位診断も含めすべて廃止され、自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder: ASD) という総称のみを用いることになった。名称の変遷があるために多少難解に感じられるかもしれないが、アスピーとはどんな人たちのことなのかを説明するために、まずはASDについて述べる。

ASDとは、人とのやりとりやコミュニケーションが難しく、また限局した興味や行動パターンを持つ生まれつきの神経発達の障害である。例えば、視線やジェスチャーなどの非言語コミュニケーション手段を使うことが難しかったり、空気を読む、行間を読

む、相手の気持ちを察するなど明示的でないものを理解したり、それに応じた柔軟な対応が難しく、また本人独自の機能的でないこだわりのために、日常生活に支障をきたしている。ASDの中には、知的障害を伴わない人が半数以上存在し、その中でも早期の言語発達が良好であった場合に、かつてアスペルガー障害と診断されていた。しかしながら、今でもなおアスペルガー障害の名前は親しまれ、当事者や家族がアスペちゃん、アスペくん、アスピー、アスピーガールなど、アスペルガーにちなむ様々な呼称で呼ぶことは少なくない。そして、この呼称は診断の有無とは関係なく、ASDの傾向をもつ個人に使われることもある。なぜなら、ASDはその名称にスペクトラム (Spectrum) を含んでいるように、その症状はありかなしかの二峰性ではなく、健常との連続性を示すスペクトラムであるとされているからである。健常と障害の間に明確に線引きをすることは難しく、ASDの症状を持ちながらも適応的に生活している人や、

ASD の症状は軽微でも生活上困難をきたしている人など、様々な人々がいる。ASD の傾向をもつ場合に、広い意味でアスपीと呼ぶ場合があり、本書の著者も広い意味でのアスピーガールに本書を読んでほしいと思っているに違いない。

ASD には性差があり、男女比はおよそ 3:1 で、女性の方が圧倒的に少ないとされている。しかしながら近年、ASD の性差研究が盛んに行われてきており、本稿では詳述は避けるが、症状の現れ方にも性差があり、既存の診断尺度は典型的な ASD の女性は疫学研究で発表されているパーセンテージよりも実は多いのではないだろうかと指摘している人が少なくない。今後アスピーガールの特徴がますます解明されていくことであろう。

前置きが長くなってしまったが、本書は、タイトルどおり、アスピーガールの心と体を守るために性のルールについて書かれた世界的にも数少ない性教育の良書である。なぜアスピーガールはこの本を読まなければならないのだろうか、と不思議に思う人もいるかもしれない。一般的に人がどうやって性に関する知識や情報を共有していくかを考えてほしい。学校の授業で学ぶ内容は基本的な知識のみであり、実際に恋愛関係において性をめぐって恋人はどう付き合うか、あるいはどんな人とは付き合っていないか、などという実践的な知識が教えられることはほとんどない。きっと、同年齢の友人たちとおしゃべりしたり相談する中で、助言を受け入れたり自分で解決方法を考え出していくことが多いことであろう。

しかしながら、アスピーガールは、その特性上、親密な友人関係を築いたり維持することが難しいために、そうした知識を得る機会が極端に乏しくなるのである。恋愛の基本はコミュニケーションであるが、発達特性上そのコミュニケーションも難しいため、望まない異性関係に陥ったり、デート商法やキャッチセールスの被害にあうケースも少なくない。本人が傷つく前に、アスピーガールにはぜひ本書を手にとり、自分の心と体の守り方について正確な知識とスキルを持ってほしいと心から願う。

著者のデビ・ブラウン氏自身もアスピーガールで、本書には本人の辛い体験を思わせる記述があり、またそれを苦勞の末に克服したことが、明確にはないが書かれている。この本は、性に関する知識と情報不足により、辛い思いをするアスピーガールを一人でも減らしたいと願う著者の切実な思いのもとに、しかしながら平易にわかりやすく、アスピーガールへの愛情に満ちて執筆されている。

第1部「心と体の守り方」では、まず自分の特性を認識すること、そしてそれは否定しなくてもよいことだ、と説いている。さらに信頼できるサポーターを見つけること、自分と自分以外の境界線を理解すること、「ノー」と言うこと、相手の「ノー」を尊重することなどが書かれている。

第2部では、「彼氏とはどういうものなのか？」を理解してもらうために、絶対に彼氏にしてはいけない人、彼氏にしない方がいい人について明確に述べられており、第2章では、「セックスに関して誤解しやすいこと」

(104頁)として、なぜ彼氏以外とセックスをしてはいけないのかということや、合意のないセックスから身を守る方法が書かれている。第3部では、「性に関する知識をもつため」に、セックスとは何か、セックス以外の性行為、安全な相手かどうかを見極める方法から、性感染症を防ぐ方法、避妊に失敗した場合のリスクまで、自分自身を守るための知識と対応方法が幅広く具体的に述べられている。第4部では、「望まないセックスから身を守るために」、セックスについて自分の考えを持つこと、自分が望まないことを男性にやめさせる方法、レイプ被害にあってしまった場合の対応、再び被害にあわないためにアスピーガールができること、傷ついた心を癒す5つのステップ、が書かれている。本書全体を通して、知識を提供するだけではなく、そのような状況に陥った場合の対応方法や選択肢が箇条書きでわかりやすく書かれている。

本書の情報はすべて、アスピーガールにとって必要なものであるが、とりわけ重要なのは境界線に関する知識と理解であろう。自分と他人との心理的および物理的境界線は、一般の人には直感的に理解できることであるが、アスピーガールにとってはひど

く曖昧なものであり、誰かに教えてもらったり、自分で学んだりして身につけていく必要がある。この境界線をめぐるトラブルは、恋愛関係や性に関する事柄以外にも通常の間人間関係でも起きることであり、境界線について改めて理解することは、アスピーガールの異性関係だけでなく対人関係全般にいい影響を及ぼすのではないだろうか。同様に恋愛関係だけではなく、日常生活でも「ノー」ということが難しいアスピーガールは少なくないはずである。本書で、「ノー」と言うこと、相手の「ノー」を尊重することなどを学ぶことができた読者は、きっと日常生活のほかの場面においても実行できるようになることを期待する。恋愛とはもともと難解で魅力的なコミュニケーションであるため、その場面に必要なスキルが、日常の一般的な人間関係においても活用できるのは当然といえば当然である。

発達障害者の目線を考えて作られたものは、定型発達の間人間にも必ず役に立つ、と常々感じてきているが、本書はまさにアスピーガールだけでなく、他者との関係性に悩んでいるすべての女性に役に立つと確信する。

(掲載決定日：2018年4月4日)